

乙訓圏域障がい者自立支援協議会
令和元年度 第2回地域生活支援拠点部会 会議録

日時 令和元年9月10日(金) 13:30～15:30

場所 乙訓保健所 講堂

出席者 13名

基幹相談支援センター・キャンパス・乙訓ひまわり園・向日市社協障がい者地域生活支援センター・NPO法人こらぼねっと京都・乙訓障害者支援事業所連絡協議会・乙訓若竹苑・乙訓福祉会・京都府立向日が丘支援学校・乙訓やよい会・乙訓の障害者福祉を進める連絡会・乙訓保健所福祉室・長岡京市障がい福祉課

欠席者 3名

晨光苑・向日市障がい者支援課・大山崎町福祉課

事務局 2名

傍聴者 3名

配布資料

- ・次第
- ・地域生活支援拠点部会「勉強会」の概要報告
- ・乙訓あゆみの郷(仮称)のあらまし
- ・乙訓地域の地域生活支援拠点を整備するにあたっての提案(たたき台)
- ・長岡京市共生型福祉施設構想・基本計画【概要版】

議事の流れ

1 「勉強会」の開催結果について

(部会長)

- ・第2回地域生活支援拠点部会を始めたいと思います。

先日8月1日にポニーの跡地に施設建設を予定されている京都杉の木会という法人に来ていただいて勉強会をしました。たくさんのご参加ありがとうございました。

「勉強会」の主たるテーマとしては生活型施設で地域密着型でやっている杉の木会の活動を教えていただくということと、生活型施設から見た地域生活支援拠点とは何かということをやまぐにの郷にお願いをしました。参加者のご家族等一般の方が40名、行政や事業所の職員が23名で計63名の参加がありました。予定よりもたくさんの方に話を聞いてもらえて良かったと思っています。

内容は入所施設から考える「地域生活支援拠点」については施設長の廣幡さんに、「社会福祉法人杉の木会」と「やまぐにの郷」の紹介を井上理事長さんから、乙訓で事業所を展開するにあたって、「乙訓あゆみの郷」という仮称ですが、どんなことをやりたいと思って手をあげられたのかの説明を井上理事長さ

んからしていただきました。

参考資料で乙訓あゆみの郷（仮称）のあらましということで入所、生活介護、短期入所、計画相談を事業内容としてイメージしていることと、元々、杉の木会はやまぐにの郷が行動障がいのある方達の支援に長年取り組んで来られて、落ち着いた暮らしをしているという実績があるので、そういう方達の受け入れも考えていくというお話をいただいています。

資料のCのところは経過です。お目通しをいただければと思います。

後はそれぞれの事業の詳細や地域との関係の仕方等の話がありました。

どれもまだ計画中的ということで変更はあるかなと思います。

それも地域の方達とのやり取りの中で、話し合いの中で変更していく可能性もあるかもしれません。

あくまでも現時点での計画ということでの説明だったと思います。

概要④の参加者からの意見・質問のところでもいただいた質問もしくは意見をその下に書いてもらっています。地域としては今足りないものを、せっかく新しく作るのだから、そういうものを視野に入れたものを作っていたきたい、事業を展開していただきたいという思いがたくさん寄せられたと思います。

一方で、このことについてはどこまで話が進んでいるのか、近隣住民の反対があることについては知らされていますが、どんな状況なのかが外に出てきません。

協力しようにも要望を言おうにも、どの段階なのかわからないのですが、情報共有がしたいという話や住民ひとりひとりの思いというのはそれぞれ違うので丁寧に対応してほしいという意見もあったように記憶しています。法人にはこの地域が皆反対で、来てもらったら困ると言っているわけではなく、来ていただいた時にやってほしい思いや願い、希望がたくさんあるということが伝わったかなと思っています。裏は京都新聞の洛西版に掲載された新聞記事です。

その後ですが、直近の近隣に住まれる方達で反対 を表明されている方達が複数で京北やまぐにの郷まで行って、施設長、理事長と話をされたそうです。

その時どんな雰囲気だったのかを聞いたら、絶対反対とおっしゃる方もいるけれど中には、もし建つとしたらこんなことはどうなりますかという建つことを想定した形での質問も結構な割合であったとのことでした。皆さんが絶対反対という空気感ではなかったので、話をする余地が出てきたのかなということをおっしゃっていました。

（委員）

・時間はかかってもずっと近所付き合いをするわけだから、そこはご理解をしていただくために時間も必要なかなと思いました。

（委員）

・家族の方がいっぱい参加されていて、期待がそれだけ大きいのだと思いました。

地域の方への理解を求めていくのに何ができるのかな、この部会でどんな風な役割を担っていくべきなのかを話し合っていないといけないと思いました。

2 地域生活支援拠点機能の現状・課題・整備内容について

（部会長）

・これは今までの話の中で出てきた事柄を文章にまとめてもらっています。これが最終ではなく、こんな意見が出ていたというところです。

・ホームページに詳しく載っているので、読んでいただければと思います。

たたき台に移ります。最終的に報告書作成のところで文章の細かいところはやります。

この経過についてのところは飛ばします。

2ページの協議における考え方についてのところも、ひとつの拠点多機能を持った施設ひとつが何かをするというのではなくて、地域にある色んな資源を活かして面的整備を中心にこの圏域ではやっていくことを考えざるえない地域だということは去年の学習会でも確認してきたことだと思います。

どこかひとつの法人に全部やってもらうという話ではないところまで確認しています。

4ページ、(2) 緊急時の受け入れ・対応に行きたいと思います。前回の話を受けて、文章化してもらっています。

①国が示す機能は短期入所を活用した常時の受け入れ体制を確保した上で、介護者の急病や障害者の状態変化等の緊急時の受け入れや医療機関への連絡等の必要な対応を行う機能です。

②圏域の現状のところ緊急事態があった時に日中であれば日中活動のところで一旦受け止めます。親等の主たる介護者に何かがあって当事者がひとりになった場合は短期入所を使っていれば、施設の職員体制を変更して受け入れてもらった事例があるという話が出ていました。

難病の方は主たる介護者に何かがあった場合はとりあえず重訪のヘルパーに繋いで、保健所と主治医との調整によってレスパイト入院ができるところを探していることが多いというのも前回出てきた話です。一緒に暮らしている家族に緊急事態があった場合は近所に住んでいる兄弟等血縁者に本人の見守りをお願いしという話もありました。

緊急事態のアンケートをここ数年やってきた中ではこの支援者が到着するまでの直後の見守りを誰にも頼めない場合があるという話はたくさん出ていました。

学齢期の人は学校機関以外には寄宿舍で緊急入舎という場合もあるし、地域での受け入れができない場合は乙訓圏域外の施設に繋いだこともあります。

精神疾患の場合で病状の急変や家族の緊急時には病院につなぐ以外に方法が考えられないということで、緊急の対応は非常に難しい、これが圏域の現状という前回の話を箇条書きにして書いてもらっています。報告書にする時はもうちょっと整理して書きましょう。

ずっと話している中で出てきているのは日中活動の時間帯であれば日中活動の事業所で対応して、その後の支援を考えることになっています。日中活動の事業所がずっと対応することは活動の主たる支援の内容が違うので、その繋げるところをたくさん作っていきたいです。

家での受け止めができない場合にショートにそのまま繋げるかとかということです。そこが次の課題になりますが増えたら良いという話を何年もやってきていると思います。

(委員)

・家族に何かあれば近くに支援センターがあるので急遽そこに入ってもらい、通所のスタッフを調整して対応するという事はこの間ずっとやってきています。

ただ、地域生活支援拠点という視点からすると法人の利用者なら何とかなるみたいなのところがあった時に、どういう形で情報共有をしていったら良いのか、それぞれ法人で日中活動で来られている利用者に関しては横の繋がりや連携の中で情報を取り合って調整してできるけれど、そうじゃない人達も含めて

考えた時の仕組みはすごく大変だと考えてしまうことはあります。

(GM)

・現状、ここで話題になっているのが難病や知的障がい、精神疾患等ですが重心の方の現状というのがこの部会では触れられていません。

実態としてここに書きたいと思うので、意見を言っていたらと思います。

拠点に重心対応のショートステイを作るか作らないかという話になっていくと思います。

(委員)

・登録研修機関をさせていただいていますが医ケアの方はかなり数が少ないので、初めましての方をどう受け止めるかという課題はずっと残ると思います。スーパーヘルパーもなかなか育ってはいません。

医ケアでいうと介護職が、まず実地演修が終わっていません。学生だと支援校の先生にお願いしたり、看護師にお願いするというのもありますが、それも顔なじみの看護師や訪看であればの場合です。

初めての人の場合は対応できるか、非常に難しいと思います。医ケアの方は関わらせてもらっていますが、何とか今は家族でカバーしてくださっているから助かっていますが、親は高齢で本人もだんだん重篤になってきたらどう対応したら良いのか、どう受け止めていくのかと思います。

(部会長)

・副部会長のところはケースを持っていてどうですか。

(副部会長)

・悩むところですが医ケアの方がもし、こういう緊急対応になった場合、今はお母さんが何とかしているところで、病院との連携で病院がちゃんと見るような手立てだとは思いますが、実際こういう福祉施設、緊急時の入所先になってくると医療的な部分で医療職がいないとその受け皿は難しいということと、もし喀痰吸引等ができる1号・2号の研修を受けた人がいたとしても、受け入れるにあたってこの人に対しては喀痰吸引がどれだけ必要か等の基本情報の整理が必要です。

これだけの情報をちゃんと整理しておけば、受け入れる可能性も出てくるのかと個人的には思いました。今までの中で重心の方も含め初めましての方、初めて受け入れる方に対して、そのところの基本情報を整備していけば、受け入れる可能性が見えてくるのではと思いました。

(委員)

・例えば短期入所を受けている事業所の利用者の登録者数が普通に多いのだと思います。

その中で職員がローテーションを回している中で急にほぼ初めまして、もしくは情報共有していた人が来たとしても、その人達を今までアセスメントしていたかを考えた時にそこを分散するような形が取れないと、支援センターのスタッフが登録者がたくさんいる中での調整はやはり現実的じゃないと考えたら、少しでも短期入所事業所が増えて、そこでそれぞれのマンパワーが育っていくという仕組みを作っていないと、現実的にはしんどいのではないかと考えています。

(委員)

・法人内の話しかできませんが重心の方はほぼ皆さんうちの事業所のホームに入居されています。

ただ365日ではないので、土日や重心の方なので誤嚥性の肺炎で入院されることも多く、そういう時に医療とも十分繋がってはいますが病院の受け入れも躊躇される部分もどうしても出てきたりします。

そこはもう何とかうちの法人の職員で入院生活も支えてやってきているのですが、こちらもこれまであまり関わりのない方というのは不安もあります。

逆にその障がい、重心の方にとっても知らない環境であったり、知らない支援者のもとでというリスクはすごく高く感じます。

最悪亡くなってしまうことの想定はいるぐらい、重心の人達にとっての環境の変化は私達が思っている以上に命に関わる大きなことだと感じます。

そういう部分も圏域でどうカバーしていけるのかというのは、さっきもおっしゃっていましたがそれぞれの事業所が力を出し合って連携しながらということが現実的なのだと思います。

(副部会長)

・具体的にどのように連携をしていけばと思いますか。

(委員)

・キーパーソンというかキーになる人は普段接している、その人のことをよくお互いに知り合っている人というのが軸になる必要があると思います。

どういう部分で連携ができるかという難しいのですが、完全に日中過ごしている場所等を切り離しては難しいと思っています。

(委員)

・そのことについてどれだけ定期的に情報共有していくのか、どういうタイムスケジュールでやっていくのかをきっちり決めていかないといけないと思います。

例えば向陵会という法人の利用者であれば24時間365日対応することができたとしても、地域という位置付けで考えた時にそういうわけにはいかないことがあります。

それは何でできないのかとなった時に現実的な利用者の対応に四苦八苦している、人材不足という状況の中でそこにまた更にみたいになった時の見えない不安感、どういう感じになるのかといったものが見え隠れしながら、たぶんやっているのだと思います。

連携という状況の中では相談支援も交えながら地域の中にこういう方がいて、こういう形で話を進めていくという仕組み作りをしていかないと、結果的にそこだけがものすごくしんどくて、負担になってしまうような形にはしないことが必要だと思ったりしています。

(委員)

・まだできるまですごく時間がかかります。色んな課題もありますが家庭に入っていくというのもあると思います。その方が一番安心できるのが家だと思います。まだ時間があるのであれば、入って行って広げていく。そういうので顔が見える、ヘルパーを増やしていく。

全体の人材が足りないのが現実ですが、家に入るとか半日ぐらいお母さんと一緒に行くとか、こういうところがあると家族と一緒に行って、その場面を知ってもらうというのがあったような気がします。

全然知らないところに連れて行かれたら緊張しますが、一度顔が見れるので、こんな人がいて、こんな場所だという経験を積んでいくのもありだと思います。そういう場所があるかどうかはわかりませんが、本人や家族が場所を知ることでも大事だと思います。

(委員)

・親の立場としたらそれが緊急時の時に自分の子供が安心できるような場所があれば、そこでの経験を積んでおくことが必要ということです。そういう場所はないと体験もできません。

そういうのがこれからできる施設の中に作ってもらえるかどうかが一番かなと思います。

今の話だと、ひまわり園がひまわり園を利用している人達については緊急時24時間365日しっかり見て

いただけるということです。それぞれの事業所で利用している人についてはそれができると言ってもらっているのだから、そこに乗っからないところ、乗っかっているのかそこが実態がわかりません。皆さんどこかには行っていると思うのですが、どんな時が乗っからないのかをもうちょっとはつきり出していかないと連携、連携と言っても何を連携していったら良いのかわからないので、本当にどうしようもないケースというのがどんなケースなのか話を聞きながら考えていました。

(部会長)

・ひとりの利用者がいて、その人が例えば日中活動やショート、居宅等色々なサービスを使っておられて、もしかしたら日中活動のサービスと通所と地活の併用をやっている地域もあります。この地域は地活はお昼しかないけど、夜の地活がある地域だってあります。

だから、通所のところに行って、夕方から地活に行くみたいなことをやっている地域もあります。

こういうものがいっぱいあって、相談がいて、この人に関する情報を皆が持っていれば、緊急事態が起きた時もこの人のことを知っているし、この人も経験がいっぱいあるから組みやすいです。ただ、量と質は足りていないです。でもまだこの人に関するチームがある場合は組みやすく、この日中活動と例えばショートや居宅が同法人の中にあると、ショートで1泊しないといけないのが対応する人が対応が難しくて対応する人が限られてしまう、この人が安心できるためにといった時に同法人にあると融通が効かせやすいです。これがなかったらショートの場合があっても、その人に関わる人が慣れていなかったら難しいという話です。同法人の中にあってこれができる、もしくはこれからのことと言ったら、同法人でなくても別法人であっても地域全体でこの共有ができるのであれば、これが面的整備です。同じ法人のショートではないけれども、違う法人のショートだけれど、やり取りもできていて、このチームが組めると言うのであれば、それがたぶん面的整備ということになるのだと思います。

これが十分に動くためには、例えば登録人数が多すぎて動けるかと言ったら対応できる職員が十分どの人にも対応するのは厳しいので、この量は増えないといけないという課題がひとつあります。

質の担保は大切ですが、質以前に人材の確保は絶対で、場所も増えないといけないし、人材の確保は絶対に出てくるというところで、これが十分に回っていくためにはこの人にとってリーチが多いほうが良いし、繋がりや経験も多いほうが良いし、皆がこの状態をキープできれば良いことだと思います。

情報共有ができて、別法人でも地域として対応できることは常に情報共有のケース会議、サービス担当者会議等日々のやり取りの中で変化や情報共有が十分できていると色々なことがきちんとわかって動けるのですが、ここに入っていない人に対して、別の人に関わっているチームがそのまま今まで関係ができてなかった人を持ってきて動けるかと言ったら動けません。私達はいつもこの人についてチームを作って、ケースの共有会議をしてきているから、充実していればしているほど緊急対応ももちろんしやすくなるのですが、足りません。このチームができていくから、ここに今まで関わってきた人をあてはめられるかと言ったらそうはいきませんという話です。そこを考えた時にどうしていくのかです。

皆にこういうものがあるような状況を作るためにはどうするかです。それぞれにあるわけだから対応ができていくという話です。いつもおっしゃってくれるのはここに乗る前の人がいるということです。

その人にとっての支援というのは、今度は緊急対応云々じゃなくて、ここに乘っていく前の人にここに乘っていくというか、こういうものを整備していく地域支援をどうしますかという話題になるかと思います。だけど、グループホームに基本いるけれど日曜日は自宅の方で、その自宅で受け止めをする家族が緊急入院をされた時には日曜日に家に帰っても受け止める人が誰もいないという時にどうしようかと

なります。ただ、そのためにはショートステイやハード面も必要です。

ショートの事業をしているところが少ないと、手が回りきらないことがあるから組みきらないということも出てきます。それはショートをもっと増やさないといけないとか、具体的にこういうことを何があっても組める、チームが動けるような状態にしておくためには地活にしても日中活動、この圏域だとほとんどの人は1ヶ所の生活介護です。生活介護を兼用している人はこの圏域だとあまり聞かないですが他圏域だと結構聞きます。そうすると枝は増えます。それがその人にとって良いかどうかは考えないといけないし、この枝がたくさんあることによって組みようも考えると、数も増やさないといけないし種類もバリエーションも増えると良いところで、この数と種類が増えたら良い、増えないといけないというところを具体的にここにあげていきたいと思います。

どんどん具体的に、こういうような利用ができる、こういう場所が必要というのをこの部会としてはあげていく方向だと、具体性があがっていくような気がします。

(委員)

・面的整備で同法人だと今のチーム体制で何とかなるかもしれませんが、それを別法人であっても地域全体で共有することで、それが面的整備じゃないと言われるとしっくりきます。これに対して個に対するチームの部分と全体に対しての資源のところ、そこはリンクしてくる部分があると思います。

この話とAさんとBさん、Cさんの話は分けないとはいけません。Aさんは今の生活をするために支援が必要というニーズがあり、それに対してチームが組まれています。何かあった時に、行政にBさん、Cさんは来ます。でも、その人にとってニーズはありません。ニーズのない人にあなたの生活絶対困っているからと言って、チーム支援を組みましょうというのはおかしい話だと思います。今、実際に支援に入っている人達に対して緊急時対応にこんな事ができるということを考えるのが1つ目のベースで、その拡大版としてBさん、Cさんのようにサービスの繋がっていない人、それがニーズがあるのかないのかはおいておき、サービスが繋がっていない人達に対してのアウトリーチといったところまでできるようになったら素晴らしいと聞いていて思いました。

(委員)

・今言うような部分が地域生活支援拠点の定義です。例えば365日、24時間ホームが開いていなかったとしても、何か緊急があった時には土日や繋がるとい形をとる部分はあります。

その人の生活や家族との関係性を考えて、機能としては何とか支えているという拠点的な動きはやっているという話です。

でもそこは、国が指し示しているものとは違うと思います。国が指し示しているものに近づけようとした時に、困っていないからという変な割り切り方というか、そういう形で良いのかと思います。

(部会長)

・具体的にこれから皆さんであげていきたいのはショートの数も増やさないといけないし、利用方法やこんなことができるショートがあったら良いということです。1回親や家族と一緒にでも泊まってみるところから始められるショートがあったら良いという、項目としては体験になります。

このチームの中にもっとこんな種類の何かがあったらもっと利用できます。

緊急時云々ではなく、種類のバリエーションを増やしていくというのがあります。そうすることによって緊急事態に向けての枝が増えてくると考えられます。というのが具体的な案をあげていくところで言うと(2)緊急時の受け入れ・(3)体験です。

例えば、A さんにとってのバリエーションがたくさんあることを考えた時に日中活動の生活介護には手が出ないけれど、地活だと体験しやすいものがあれば、A さんにある色んなものは B さんにも体験しやすいものかもしれない。いきなりガイヘルはハードルが高いけれど、家族が出かける時に一緒に行くみたいなものが増えてくると、ニーズがあるけど上手く繋がらないのか、ニーズがないのではなくてニーズがわからない。自分にそんなことがあるって知らないから要求のしようがないとなれば、福祉サービスを子どもの頃から積み上げて受けてきて、今まで繋がってこなかった人達も、この中の体験しやすいものや使いやすいもの、何かちょっとだけでもこれだったら体験しても良いみたいなものに上手く繋がっていけばというのが、相談のような気がします。

自分が困っているのかどうかもわからない、でも今の状況から、それを自分が使っても良いのかもとか、きっかけが作れるものが、ふと電話してみようと思えるものがあれば、これだけでもと繋がっていくうちに、ここにいた人がここにいるように変わっていけるかもしれないのが (1) の相談のような気がします。

これに繋がっている人はこれがあって、緊急時アンケートの時に言っていた相談とはちょっと趣旨が違うと思います。緊急時アンケートの時に言っていた相談は今困っている時にあちこち電話するのではなくて、ワンストップでかけたら何とかなるというところをイメージしていました。

そこもあります、ここで言う相談はこのニーズがあっても上手く繋がらなかったり、自分のニーズがわからなかったり、ニーズとして持って良いことが上手く結びついていなくて、自分だけで、家族だけで生きていかないと思っている人が、ふとそれってと思えるようなきっかけを作れるような窓口がたくさんではないけれどあるというのがここで言う相談だと思います。

それだけではありませんが。それが (1)、(2)、(3)、大きな意味でいうと (5) のところにあたるのかなという気がします。生駒市の例で、どこにも繋がっていない人が相談や今繋がっているところと上手くいっていないというのも含むと思うのですが、日と時間は限定になっているけれど、その時間そこに電話したら相談してもらえするというのをやり始めましたという報告をもらいました。

それ以外に 24 時間 365 日深夜であっても SOS を発することができるワンストップの相談というものは、この相談とはまた違う意味で、これはこれで必要なものかもしれないとは思いますが。

ずっと言ってきていることを整理するとそういうことだと思います。

(副部長)

・ 5 つの柱が出ていますが全部リンクしているので、こうやって分けると難しいです。

今回は 2 番の緊急時の受け入れ・対応のところを埋めていきながらでないと思整理ができにくいと思います。色んな話を聞いて勉強になりましたが、今回は 2 番の緊急時の対応のところでも 1 回絞って、出しても良いかなと思いました。その整備内容を埋めるとしたらどんな文字にした方がわかりやすいのか考えています。

(部長)

・ まずは数だと思います。

(副部長)

・ 数を増やして、短期入所の事業所が 5 つだとしたら、5 つ共が常に空室を 1 室空けておくという決める事すると使いやすくなるのか。満室なので受け入れできないという理由はなくなると思います。受け入れ側とすればそんな簡単なことではないというのはよくわかるのですが、ひとつの手段としてはあり

だと思えます。

(委員)

・南山城とかは緊急で受けるための空き床を取っておられるのですか。こういう人を受け入れるためみたいな形で運営しているのですか。

(GM)

・大きいところだと、居室は当然個室です。ただ、医務室を持っています。ショートステイの部屋も持っていて、そこも一杯だった場合に医務室も宿泊可能です。

(部会長)

・支援校の寄宿舍が緊急入舎で、手続きをもちろん踏んで地域の福祉がどこもだめで、でもその子の教育環境を保証するために制限は色々あるのですが緊急入舎を受け入れてもらっている場面があります。その時はそれ用に空けてあるのではなくて、緊急入舎とって今日言って今日入れるわけではなくて、一定の手続きと段取りがあった後で、実際にそこに入舎することになります。

緊急ではなくて、他の人達の利用の時期をちょっとずらして、部屋を空けてもらったりとかしているのですか。

(委員)

・最近寄宿舍の定員自体が減っているので、現在入舎している人数は施設の許容人数に対して少ないです。例えば、緊急で両親に何かあって、どうしても事情で色んな福祉をあたったけれど行政の方で無理な時は学校に依頼があって、学校の中の入舎検討会議を経て、行政に返事をして、最大で3週間、そこで緊急の入舎をさせていただいているパターンと、自閉症の方等、環境の変化に弱い方や日中のスケジュールの変更に弱い方、緊急はいつ来るかわからないので、そういう時に備えて体験的に、計画的に、まず希望を前年度に聞いておいて、例えば15人であればその15人を年間でバラけて入舎を計画的に学校で運用的にやっているのが、これでいう体験にあたると思います。

ただ、24時間医療的ケアを必要とする方が体験できるかというと、看護師がいない、舎の指導員は3号研修を受けていないので、医療的ケアの方は申し訳ないけれど、入舎については条件の制限があり万全ではないです。

(部会長)

・昔、寄宿舍が満杯だった頃に、どうしても緊急があった時に時期をちょっとずらしてもらったり、今いる人を融通してもらっていたこともあったと思います。

施設側にとっては場所も開け、人も待機というのは経営上すごく難しいところです。そこを絶対その日にそこにいなければならないことはない、時期がずれてもOKな人がいた時に緊急が入ったらずらしてもらいたいやりくりの中で可能な場面は出るのかを聞いたかったのですが昔、寄宿舍でそういう例があったように思ったので聞いてみました。

(委員)

・満杯の頃はそういう対応をしていたかもしれませんが。今は実際には入舎している方の解除が多いと定員が減っていくので、解除の幅は広いけれど人数は少なくなっています。

(部会長)

・日常的に、体験的に使えるぐらいのキャパがあれば体験的に使う予定の人がいて、どうしても緊急時にその体験をずらすとかそういう運用になると思います。

ずっと空けておくのではなくて、絶対その日でなければならぬ事情のある場面は無理ですが、大きな施設になってくると融通の効かせ方がいつも満床だけど、この期間空いている部屋があるとか、本来は居室ではないけれど使えるという部屋が、キャパが大きいところはそういうことがやりやすいというのが現状だと思います。

(委員)

・うちは地域生活支援センターが短期入所の指定を受けています。例えばひまわり園は夜間いないから、緊急時にはそこで寝泊まりすることもできないのかな、柔軟に対応できないのかなと思います。

(部会長)

・とにかく雨、風しのげて、暑すぎず、寒すぎず、とりあえず寝れるところで、虐待等の緊急時に身柄を確保しないとイケないところを提供できる事業所の契約というのはしていると思います。

(委員)

・ひまわり園としてはしていません。地域生活支援センターとしてです。

(委員)

・うちのところも通所ですがベッドと冷暖房とコンビニがあって、お風呂がないけれどシャワーはあります。そういうところも柔軟にと思います。事業所によってはショートだけとするとキャパオーバーするのは目に見えているので、通所だけでなく学校等、単なる宿泊ということが出来る環境が整えられるところの資源がどこまであてはまっていくのかなと思います。それでいて、その人が一番安心できる場所だと思います。

(部会長)

・とにかく一晩過ごせる場所で、例えば確保、リスト、その場合のお泊りグッズみたいなものが整備できればと思います。

(委員)

・減算しますみたいなことがないようにしておかないとイケないと思います。

(委員)

・ショートに関して減算は緊急時にはかかりません。ショートの看板を掲げていないところをお願いする時には市としての緊急一時みたいな形でしか補填ができません。虐待等で使えるのだとしたら緊急一時じゃなくてショートを使ってしまうと減算もかからないし、その方が良いということです。

(部会長)

・基本的には日中フルに使っていても良いから、ショートを増やしていくことで、そこに静養室や休憩室、例えば皆の食堂等に一晩だと簡易ベッドを置いてということも考えられるけれど、ショートの数を増やすというのは必要です。それはハード面です。

緊急事態の時の運用や対応をした時に、どういうことに引っかかっていくのか、引っかかっていかないのか、保障があるのかという仕組みの問題なのでソフトの問題です。

その超緊急時の対応から新たな日常生活支援を組み立てていく時には、支援の質と量と種類がいるわけです。副部会長はいつでも必ず緊急時に使える場所を空けておくぐらいの量がいるということですね。

(GM)

・生駒市の例だとずっと空けている部屋があります。それは施設がボランティアで空けているのではなくて、市からいくらか借り上げ料みたいな形で補助が出ています。

市がかなり安い借り上げ料で確保しています。現実、ホームレスで身元不明の人が警察からここに来て使っているとか、障がい者虐待の関係で避難として使う等そういう例があがっていました。

(部会長)

・この時の支援者はグループホームの人ですか。

(GM)

・グループホームが1階で、空き部屋が2階なので、グループホームの職員が2階にも回っています。

(委員)

・例えばひまわり園が色々なショートステイをやっているとします。その中で体験枠をひとつ作りました。そこに圏域から体験してみたい人達のニーズを聞いて予定を埋めていきました。何か合った時に急に変わりますというのはシステムとしてはありだと思えます。

支援者は今は別に何もなければ今後のために体験してみようという人と、すごいことがあって来る場合があります。お母さんが倒れたとか緊急事態になった状態に来て、そこしか今過ごせないという状態になった人の支援差にはばらつきがあると思えます。その場合は埋めきれののかなと思えます。

(委員)

・それは職員を代えるとかしないとしようがないと思えます。1年目の職員と経験のある職員とでは対応が当然違います。そこは急遽ローテーションを変えることも出てきます。誰彼なしにすべてのことができるわけではありません。僕らだって経験があっても初めて会う人は初めましてだから、こうなのかなということは何となくあった時にわかったりはするけれど、その人がどういうことをどうしたいのかはその時になってみないとわからない時はあります。そうなった時にどう判断するのかという判断力がすぐ求められると思えます。そこは経験値で判断しないとイケません。いきなりそういう人が来て、1年目でというのはいかないかなと思えます。そういう条件作りは必要だと思えます。

(委員)

・そういう意味ではショートステイの減算がかからなくなってから、何個かお願いして、無理だなと思うのは支援者が組めないと言われてしまうところです。

話はずれてしまいますが、人材のところも関係するような気がします。

(部会長)

・緊急事態に対応するためにAさんの支援者チームで対応でききらない場合に、仕事じゃないけれども緊急事態が発生した時に晩御飯を食べても良いけどお酒を飲んではいけないというオンコール登板みたいなものが、もしかしたらいるのかもしれませんが。そうすると、そのことに対して何らかの予算がつかないと回っていかないということだと思えます。

でも、地域全体としてはオンコール体制というのはSOSのワンストップと同じことで考えられなくはないという気はします。

ただ、行ける支援者がいつもオンコールかと言われたら、それはやっぱりダメです。層が厚ければ厚いほどひとりへの負担は減っていくから回しやすくなるというか、考えやすくなるのだと思えます。

(委員)

・この体制を組んだところで、20年先には今頑張ってくれている方々は一線から退いているので、その部分が欠けるとだめです。いっぱい背負いこんだものを継続していかないとイケないし、その担い手も代わっていかないとイケません。今はショート等を頑張って受けてくれているところがあるけれど、そ

うじゃないところがどこかで来ないとだめだとすごく思います。今は良いけれど 20 年後にはだめだったという話にしかありません。

(部会長)

・そこは人材育成の話になります。私はこういう支援をするためにはこの何十年の、特に直近の障がい者支援の変化の中で、その時代を生きてきた経験を積んだ職員ができることというイメージではなくて、この支援をするためにはこんなことができる職員が必要だということだと思います。

経験を積んでいる誰々さんというイメージではなくて、この支援をするためにはこれだけの力が必要だという人材育成の方向性は考えていけないといけない時だという気がします。

今まではわからない中、経験則でやってきた部分というのはすごくあります。

20 年後、30 年後と続いていくためにはこういう支援をします、こういう支援のところにはこういうスタッフが必要です。そのスタッフが持っていないといけないスキルはこうですというものが明確化されていきます。この地域拠点の次の話になると思います。こういう拠点があります。こういう面的整備をします。こういう機能を持ちます。そこで対応する職員はこういうスキルを持ってくださいという人材像みたいなものは、この次の段階できっちり話をしていけないと思っています。

(2) 緊急時の受け入れの具体的なところでショートの話、例えば部屋が空いていれば、部屋を空けておくということに対する市の負担とか、それは人材を置いておくという意味ではなくて、そういう仕組み、ソフト面の整備も提案の中に盛り込んでいけるとと思います。

本当だと居室となるものがどこにでも空いている状態は、両面で、慣れた場所で泊まれることがベストだけれど、慣れてなくても泊まれる場所の確保も、生駒で言えばホームレスの人が警察に保護された時にその身柄を一晚預かってくださいというような形でも使えるようなものはいるのだと思います。それがきっかけで支援に繋がっていくこともありえます。その後はまた支援を組みます。繋げるということは C さんだった人が A さんになるということだと思います。(3) 体験のところで言うと、今言ってくれたのは家族と一緒にでも泊まれる宿泊体験ができるということですか？

(委員)

・その場所に慣れるということですが。乙訓は支援学校を中心に 50 年経っています。寄宿舍が 50 年前からあり学生時分にそういう経験されていて、特に教員の方に支えてもらって、18 歳で出ました。卒業すると今度は学校と違って支援の場が小さいという感じを受けます。寄宿舍は皆好きだと思います。昔の先生に会いに、学校を卒業して就職した子が会いに来ます。そこは寄宿舍はすごく力があると思います。慣れていくことです。重心の方で新たな環境に行くとすごくドキドキする人が、家族と一緒に昼間だけ行って、ゆくゆくはここに泊まれるようになろうねと言って帰って来ます。そういう経験が積めたらなと思います。昔、寄宿舍でカーテン入れただけで眠れなかった子が眠れるようになったという伝説がありました。ストレスで体の変調が起きないように丁寧に、そういう経験を積めるようにできないのかなと思います。家に泊まれる、居宅で誰か行く、ホテルもありだと思います。経費的には難しいかもしれませんが、そういう社会資源も増えつつあると思います。

(副部会長)

・この課題の 2 つ目に「生活力をつけるための生活訓練、特に一人暮らし体験ができる GH が必要」と書いてありますが、中にはグループホームに抵抗があるという一人暮らし希望の方もいらっしゃいます。グループホーム以外でのそういう体験ができる場があれば良いと思います。

例えば、アパートの一室を利用者が借りているとか、グループホームの施設内ではない本当の一人暮らしを体験できる場があるとすごく嬉しいです。それは制度としてはいいですね。

(GM)

・これも生駒市がやっています。マンションでもやっていて、始まるまでに色んな聞き取りをして、条件をクリアできなければ断るというやり方をしています。1週間の体験だったと思います。家族と一緒にというのもやっています。常に空き部屋にしています。家族用の部屋も作っています。2部屋一緒にして、常に空き部屋で緊急時にしか使わないので、普段は家族との体験使いをしています。家族と一緒になので、「今日はごめんなさい」と言った時でも別に困りません。そういう使い方もできると思います。

(部会長)

・入所施設の中に生活訓練部屋みたいなものがあり、台所や居室があって生活ができる2DKぐらいのスペースです。普段はその入所施設で暮らしているのですが、そこに家族が来て一緒に生活体験をするというのを持っている入所施設は地方に行くことがあります。全部完備しています。入所施設のところで暮らすのではなくて家族が来た時にそこで一緒に1泊なりするという体験ができるのもあります。

家の中にいてじゃなく、そういう体験もあるかもしれません。

また、場所に慣れるためにいきなり一人は大変だから家族と一緒に試してみるという体験を、今後使うかもしれないところに慣れていこうという趣旨の体験もあります。

もうひとつはシチュエーションに慣れるということでアパートを借りて一人暮らしの体験をするには準備にお金がかかるので、そういうものが完備している状態で1週間暮らしてみるとかです。1週間一人で暮らしてみた時に、やってみないとわからないことがあります。そういう体験ができる場所という意味です。色んな形で体験が考えられると思うのですが、そういうものが圏域の中にあれば夢は広がるし、やってみた結果無理ということもあると思います。日中は全然問題なくても夜一人でいることに耐えられない等やってみてわかることがあるので、色んなバリエーションの経験ができるスペースがあればいいと思います。それをどんな仕組みにするのか、それに対してどんなお金の出方がするのかな、それをショートバージョンにするのか、何でやるのかはソフト面では考えてもらわないといけませんが、そんなのがあればということです。

西村委員がいつもおっしゃっているのはニーズがない方、本当は困っているだろうけど本人は困っていると思っていないとか、何とかかなと思っていないというような人達がどんなことがあれば、きっかけになるものをイメージしてもらったらいいかなと思います。

(委員)

・場所があればということですか？それでは解決しません。来てもらわないことにはどうしようもないです。引きこもっている人というのは本人は別に困っていません。でも、同居人が一人でもいるから家にいられます。引きこもって、一歩出る勇気はありません。そういう人だからどんなに施設がたくさんあっても行くことができません。だから最初のきっかけとしては来てもらいたいです。本人に会えなくても根気よく来てほしいです。そういうのを積み重ねていかないと第一歩が踏み出せないと思います。

(部会長)

・それは緊急時というよりも支援に繋げていくニーズの掘り起こしのところで、どこに入るのかなと思います。どういうことがきっかけになるか、どういう支援がどこに繋がればいいのかということは常に考えておきたいです。例えばこういう緊急時のことで必要とする人のリストを作るかはわかりませんが、

そういうことでアプローチしていきたいです。何かアプローチする口実がないと毎日、相手がドアを開けてくれなくても定期的に通う等アプローチするのは大事ですが、その理由がないとだめだと思います。何かそこに関わっていくきっかけや理由がこの話の中から見いだせたらと思います。

(委員)

・何回か顔を合わせて、その人に馴染まないと絶対出てこれないと思います。

(部会長)

・体験の方はどうですか。これに相談プロジェクトでやっているお風呂が入ってくると思います。在宅の生活は継続していきたいけれど、どうしても難しいというのがお風呂です。お風呂は大きな話題としてあがっています。そこも一般家庭でやりにくい支援というか、うまくいかなさがある支援がお風呂だと確かに思います。そういうことは体験に入れるのか、どこに入れるのか考えないといけません。

(委員)

・親御さんが高齢化して本人の障がいの受容が進まなくて、親の方が困って言いに来られます。本人が僕は違うというのですが、唯一サロンは違うと言いながらも来られているので、今がっちり攻めなくても、緩い繋がりでも継続して、緩いのなんかいないという支援者もおられますが機嫌よく来られているので、緩い繋がりでも続けることで本当に困った時に言えると思います。がっちりした支援も必要ですが、それを嫌がる人には緩い繋がりでも良いと思うので、待つことも大事だと思います。

(部会長)

・そうやって何らかの繋がりを作っておくことで、自分自身が困っていないと思っても、日常は回っていても何かちょっとしたことがあるだけで、大きく困ってしまう人達があります。そこが障がいの部分だと思うので、何とかやりくりできれば良いのですが日常の毎日回っているルーティーンがちょっとずれたり、ちょっと何かがあっただけですごく大きな困り感になって、その時には発信しにくいとか、その時には支援が入らない、そんなに急には入らないとなった時に緩い繋がりでもあれば入りやすいと思います。

(委員)

・そんなに踏み出さずに緩い繋がりを持ち、次にもステップを進めるとしたら、ボランティアに行ってもらえませんかとか困っているので手伝ってもらえませんかという方法でまた次に入ろうと思って、今計画中です。

(部会長)

・雑談っぽいのですが色んなことをあげていく中でイメージを具体化していくということをこの部会ではしていきたいと思います。

今年度内にもう一回色んな話を詰めていくチャンスがあると思うので、今日色んなことを整理してみました。そこから思いつくことを発信していただけたら嬉しいです。次回までに具体的にこんなものがあったら豊かになる、もしくはこんなものがあたら大きく困りごとがあっても大きく困らなくて良いというところで考えてきてもらいたいと思います。思いついた時につぶやきをメールで GM に、もしくは一斉送信で送ってください。次回は 11 月 13 日の水曜日の 13 時半から 15 時半です。お疲れ様でした。

次回：11月13日（水）13時半から